

浄住寺の歴史

浄住寺は現在黄檗宗の寺となっているが、もともとは円仁（794－864）によって天台宗の寺として建立されたという。しかし、後に建物などは打ち捨てられ、1261年から1264年の間に葉室家当主によって再興され、叡尊上人（1201～1290）を請じて律宗のもとに再建された。

1272年に葉室家当主が亡くなると、葉室家当主が祀られ、その後 "菩薩寺" と改称された。守護大名同士の勢力争いが勃発した（応仁の乱：1467－1477）まで寺は繁栄が続けたが、京都の他の寺と同じように兵火に建物は破壊された。葉室家は1689年に鉄牛（1628-1700）を招いて黄檗宗の寺院として再興した。その当時から、現在の名前で呼ばれるようになった。

黄檗宗は1661年に中国僧隠元（1592－1673）が萬福寺を建立して作られた宗派である。中国では黄檗宗は臨済宗の一派となっているが、日本に伝わってから200年間で独自の進化を遂げたため、臨済宗から分離となった。隠元禅師によって伝えられたものには中国の明王朝（1368－1644）に大きく影響を受けた寺の建築様式、衣装、葬式様式などがある。他の大きな違いとしては、中国語で行うお経の唱え方にある。禅の他の宗派と違い、梵唄と呼ばれるお経には引磬(小さなお鉢型の鉦)や大きな太鼓も使われる。本堂にある仏像たちも臨済宗とはかなり違った形で、龍のモチーフで飾られた朱色の法衣が描かれている。